



奈良の輝く 企業×起業

vol.54

文化財の修復に
選ばれている
伝統の宇陀紙

福西和紙本舗
八代目

ふく にし まさ ゆき
福西 正行さん

※右から2人目は、
九代目 福西 安理沙さん

守り続ける手漉きの製法

吉野地方の国栖地区に紙漉きを伝えたのは、約1300年前に壬申の乱で逃れてきた大海人皇子だといわれています。江戸時代には宇陀の商人が売り捌き、「宇陀紙」と呼ばれるようになりました。

初代が創業したのは江戸時代中期。昔は200軒あつた紙漉き屋も、今では5軒だけです。多くの工房が割り箸づくりに転業する中、6代目の祖父は伝統的な製法を守り抜きました。私も原料である楮の栽培から手掛け、一枚一枚を天日で乾燥させる昔ながらの製法を続けています。表具裏打ち用和紙として愛用されてきた宇陀紙は、現代でも国宝や重要文化財の修復に使われています。

吉野の自然が育む最高級の和紙

宇陀紙の特徴は、地元特産の白土を混ぜて漉くことです。また、吉野の澄んだ水は楮の皮をさらすのに適し、ねりと呼ばれる粘剤の働きを高めます。工房が南向きの斜面に建っているのも、なるべく長く太陽の光に当てるため。吉野の風土があつてこそ宇陀紙なのです。こうしてできた和紙はしなやかでありながら丈夫で、独特の風合いを備えています。ボストン美術館や大英博物館などでも修復に使われており、芸術家や照明デザイナーによる作品にも活用されるなど、用途も広がっています。



一方で、一般の人が手漉き和紙を使う機会は少なくなりました。そこで、このような伝統産業があることを知ってもらうため、先代が手漉き和紙体験を始め、その意思を引き継いだ私は国内外での講演やワークショップ、県内の小学校での体験学習なども行つてい

ます。地元吉野町の小学校では、児童自ら卒業証書を漉く取り組みが40年以上も続いています。

「二点の曇りもない紙を漉き続ける」というのが先代の教えです。伝統を守ってきたおかげで、世界にも堂々とうちの和紙を出すことができます。今後本物の和紙を提供していきます。

九代目に継承する製法と思い

宇陀紙は原料をはじめ、道具もすべて国産品です。しかし少子高齢化でその作り手がなくなり、入手に苦労することがあります。作り手探しや生産支援のために各地を回ることも多くなり、原料や道具が安定供給される環境を整えて、九代目の娘につなぎたいと思っています。九代目は学芸員の資格も持ち、宇陀紙のさらなる活用方法を見つけてくれると期待を寄せています。

昔ながらの手法を今も続けているからこそ、うちの和紙が評価されています。これからも製法と技術を受け継いでいきたいです。



福西和紙本舗

福西和紙本舗

所 吉野町窪垣内218-1

☎ 0746-36-6513

🌐 fukunishiwashihonpo.com

江戸時代中期より伝統的な製法を守り続ける宇陀紙の工房。美しい手漉き和紙は世界で評価されている。

